



SPELT

March 2026. Vol.14, No. 2

実用英語教育学会

NEWSLETTER

## 目次

巻頭言

実用英語教育学会 会長 釣 晴彦

第 15 回 実用英語教育学会 (SPELT) 研究大会 報告

(2025 年 2 月 22 日 Zoom によるオンライン開催)

「ビジョン 3-16 : AI 時代の教員論とその実践」

講演

『生成 AI 登場後の私たちと英語との関わり—AI 時代の教員論』

山中 司 教授 (立命館大学)

発表

『生成 AI 活用による、アウトプットの質と量向上に向けての実践』

山内 優馬 教諭 (立命館守山中学校・高等学校)

お知らせ

実用英語教育学会会長 釣 晴彦  
北海道文教大学 教授

2月22日に第15回総会・研究大会をZoomにて終えました。休日にも関わらず参加していただき、皆様には本当に感謝申し上げます。今回は、立命館大学生命科学部生物工学科教授の山中司先生に「生成AI登場後の私たちと英語との関わり：AI時代の教員論」として講演して頂きました。山中先生は、AI活用の最先端の研究をしています。AIの普及は、2022年末から2023年初め頃です。総務省が「生成AIはじめの一步～生成AIの入門的な使い方と注意点～」として公表した資料では、Facebookが1億人にユーザーを拡大するまでの期間は4年半、Twitterが4年、Instagramが2年半、TikTokが9カ月、そしてChatGPTはわずか2カ月だったそうです。私は興味を持って2023年から活用しました。英語検定試験の準2級、2級の練習問題作成に使い、現在は英作文にも活用しています。ただAIの威力は日進月歩の進化で、予想を超えて次から次へと活用用途が出現してくる状況には脅威があります。まるでゲームに夢中になるような錯覚を覚えるからです。山中先生のご講演は、AIの根本的な定義から今後の教育現場の活用にどのように効果を高めることができるか、そしてフィジカルAIの出現まで、示唆に富む内容でした。

また、立命館守山中学校・高等学校の山内優馬先生は「生成AI活用による、アウトプットの質と量向上に向けての実践」として、クラスで実践している活動を発表していただきました。この活動を拝見して感動いたしました。ここまで活用しているのだと。AI活用による「表現の幅」「多様な考えに触れられる機会の充実」「学ぶことへのモチベーション」として、総合的に機能している授業は実に驚きでした。山内先生のこれまでの実践の苦勞から授業の一人一人の自主的な活動参加に促す手法にAIを上手に活用できている授業だと考えます。今回は、山中先生のAIについての理論武装から、それを上手に意識して活用実践している山内先生の授業。まさに、この学会の意義を再確認できる内容で、大変勉強させられました。AIとの共存時代を迎えて、余談ですが、私は「認知症予防」の手段としてこのAIの活用を今後ももっと極め続けていきたいと確信しました。

私事で恐縮ですが、14年間実用英語教育学会の会長を務めさせていただきました。この3月で北海道文教大学を退職します。本当にお世話になりました。今まで出会って活動を共にしてきた先生方には感謝しかありません。今後は新体制のもと、実用英語教育学会が一層発展していくことを強く願っています。皆さん宜しくサポートをお願いします。

小、中、高、高専、大で教壇に立つ会員が、実用英語教育学会にて情報や手法を共有して、さまざまな領域と水準における英語教育の多様な実践と研究を行い、共に学んでいくことを今後も望んでいます。理論と実践のバランスを維持して研修していくためには、この学会の意義は大きいと考えます。皆様のご指導、ご支援を一層賜りますようお願いして最後の挨拶とします。

## <講演>

### 『生成 AI 登場後の私たちと英語との関わり—AI 時代の教員論』

講師：山中 司 教授（立命館大学）

---

#### 講演者プロフィール

2011 年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程修了。博士（政策・メディア）。立命館大学生命科学部准教授を経て 2018 年より現職。専門は応用言語学、言語哲学（プラグマティズム）、英語教育政策。著書に『プラグマティズム言語学序説：意味の構築とその発生』（共著、ひつじ書房）、『プロジェクト発信型英語プログラム：自分軸を鍛える「教えない」教育』（共著、北大路書房）などがある。

---

生成 AI の登場は、英語教育、英語学習をどのように変えるのか。そして私たちと英語との関わり方にどんなインパクトを与えるのか。最終的に私たちは英語を勉強しなくてもよくなるのだろうか。それらの問いに、山中先生が全国に先駆けて行ってきた大学英語教育における生成 AI の活用とその実験の知見から、AI と英語教育のこれからのあり方についてより現実的に考える機会となりました。

.....

以下に参加者からお寄せいただいたコメントを抜粋してご紹介します。

・「一身にして二生を経る」という福沢諭吉の言葉を、ご紹介いただき、たいへん感銘を受けました。私たちは、「生成 AI を使わない手はない」という山中先生のお言葉のように、積極的に活用していくべきと考えます。まさに、生成 AI の出現は、あらゆる分野に影響を及ぼすパラダイムシフトであると感じています。現在は過渡期ですから、山中先生が言及されたような問題点も、産業界のみならず、教育界でも枚挙にいとまがないほどです。学生との「いたちごっこ」の面もあります。けれどテクノロジーの進歩とともに、これからますます、生成 AI は多方面で発展していくことでしょう。そんな時代でも、山中先生は、「教師の存在はゆるぎない」「（教師不要論は）杞憂に終わる」と講演の中で話されました。たいへん心強く、AI との共存に希望が持てるお話として、勇気をいただきました。ありがとうございました。最後に蛇足ですが、私は、学生に、「英語は AI やデバイスやアプリが登場しても、（アプリなどを使用せず）身体的に使用される世界共通語です。なぜなら世界中で英語教育が標準的であり、英語だけは、そうしたアプリを通した日常会話は一般的に見られないからです。日常の英会話まで機械依存をしてしまうと、相手に不自然な印象を与える場合があります。eメールなど、書き言葉においては、そうしたアプリや生成 AI を、積極的に利用してください。」と話していますし、学生はその説明に納得しています。

・教員の業務負担の軽減に向け、生成 AI を活用したアプリが、ここ数カ月様々な業者が開発して勧誘してくる世の中になりました。先生の講演の中で、想像以上に AI が人間の心に入り込んで、今やフィジカル AI の実現も可能になってきて、まさに多種多様な AI の出現も予想されると。AI の活用の本質を見極めて選択していかなければとのお話でした。今後の AI との関わりに大変示唆に富む講演でした。ありがとうございます。

・意味のある問題提起をしてくださったことに感謝します。教員としては英語専科暦2年の若輩者ですが、一般企業での経験が長く海外勤務歴も長いので、「児童・生徒が実社会に出て行く姿を見据えたうえで英語教育・生成AI利用の議論」の少なさを懸念していました。世界全域に顧客と拠点を持つ企業で働いていましたが、現在の共通言語はもちろん英語です。シンガポールやマレーシアのような多民族国家に10年以上滞在し、40の国々を旅行しましたが、現在のところ、どの国の都市圏でも共通言語としての英語の有用性は大変高いです。「国際的に活躍できる人材の育成」という観点では、この「仕事・日常生活の両面での英語の有用性」が失われる状況が近々予測される場合（生成AIだけではなく地政学的な側面などにおいても）、外国語教育で「英語だけ」をやる意味が崩れます。「外国語を学ぶことで教養を深める」という観点ならば、「英語だけ」の意味は当然薄いです。小中高大によって、外国語を学ぶ意義は少し異なると思いますので、校種による外国語教育の目的（実用と教養のバランス）をきちんと定義したうえで、世の中の流れを注視しながら進めば間違った方向に進む確率は低いと思っています。その上で、先生が提示してくださった「もう一歩先の議論が必要」というのは、英語だけにとらわれない外国語教育全般に関連する議論であり、学力の本質を高めるための（創造性の高い教育を行うための？）ものです。生成AIをどう使うのか使わないのか・使用にあたってはどんな工夫ができるのか、より本質的な議論が深まることを願っています。

・山中先生の〈AI時代の英語教育〉では、「行く先はどこ？」という問いかけの重要性を痛感させられました。それを考えずに、ただAIツールを日々の英語指導活動の中に取り入れているだけでは、英語教育者である自分自身とAIとの距離感を適切に保つことができなばかりか、教えている生徒たちが自分とAIとの距離感を適切に保つことができなくなってしまうという恐れがあることへの警鐘を鳴らしてくださったことに心からの感謝を申し上げます。山中先生が立命館大学の英語教育において統括的な働きをなさっていると知り、とても安心いたしました。

・私の教えている勤務校の高2、高3だけに限って言うのですが、生徒のレベルに必ずしも合っているとは言えない側面の有る高度なパフォーマンス課題に積極果敢に取り組ませていると感じることが少なくありません。能力以上の課題に取り組ませ、能力に足りない部分があっても、現有能力を最大限に活用して課題を乗り越えていく力を伸ばすというのは、とても現実的に意味のある試みであり、しかも時間を要する取り組みなので、それを実践し続けること自体は素晴らしいことです。しかし、backfireを招くことも事実です。実際、英語力が平均的かそれ以下の生徒たちは、それらの課題の達成を通して、英語能力を高めるというよりは、締め切りまでにそれらの課題を完成するためにAIを最大限に活用する能力だけ高めているという感がぬぐえません。勿論、その過程を通して学んでいることも少なくはないと思いますが、課題を通して彼らが学んでいる内容の質、量、定着度を見ると、必ずしも教育効果を上げているとは言い難いものがあります。

・AIに全てをやらせてしまう安易な使い方へと生徒を走らせないようにするには、活動の意義づけや課題の内容や取り組み方などに十分な留意が必要ですが、その「留意」の良し悪しの判断基準に、この感想の冒頭で触れた「行く先はどこ？」という問いかけが決定的に重要な役割を果たすのだと思われました。これは、behaviorismかcognitivismか、という教員の考え方が毎回の教室活動の選択と決定に大きく影響してくるのと同じくらいのインパクトを持っていると思われました。他の様々な情報に加え、そのことに気づかせていただけたことが、今回のご講演で一番印象に残った、そして、一番感謝なことです。山中先生の今後のご研究の発展と、その成果が大学教育現場で豊かな実を結んでいくことを願っております。

・とても中身の濃い、貴重な学びの時間でした。日々変化する日常の中で教育のあり方も変わっていくまさに過渡期の今、「先取りして子ども達に未来を見せてあげることができる」教育を自分も目指していきたいと強く思いました。「己の違和感を信じながら変化を楽しむ」という言葉が心に刺さりました。そして人間ができることを効率的にやっただけではダメで意味がない、けれどでは根本的にどう使っていけば、というところが小学校の授業の中ではまだわからないです。これからも学び続けていきたいです。ありがとうございました。

・かなり熱の入ったご講演で、それだけ言いたいことが沢山おありなのだということが伝わってきました。生成 AI を使っているかを検知できるツールができると、その次には AI 検出を回避できる AI Humanizer が出てくるなど、いたちごっこであると思いました。今後は「ズルして」学習課題をこなす学習者と AI をうまく使って学力を身につける学習者との間での学力格差は広がることでしょう。教員ができることは、授業の中で後者の使い方を提供することではないかと思いながら聞いておりました。

・大変勉強になりました。このような時代になった時に、「本当に英語を学ぶ必要があるのか、根幹を考えなければならぬ」という言葉が強く印象に残りました。

・貴重なご講演ありがとうございました。AI を使う時代が普通の子供たちと英語の意義というのを考えさせられるようにしていきたいなと感じました。

・AI 活用の最前線の動きと専門家から直接お話を伺うことができ貴重でした。ショートカットで結果だけは出せるが、その過程プロセスではあまり学んでいない、という指摘がまさにそれだと思いました。表面的にだけ見栄えよく完成させて何もしていない、伸ばしていない、伸びていない、に鋭く突っ込んでいく必要を感じ、それでよいのだなと思いました。

・冒頭部分から「英語キャンセル界限」「デロイトの返還金」「AI プロジェクトの95%の失敗」と盛りだくさんの内容を頂き、食い入るように講演を聞かせていただきました。私自身もここ数か月 AI を育てるといいますか、よきパートナーとして活用しているので、とても分かりやすく教育面だけではなく人生においてプラスとなるお話でした。

## < 発表 >

### 『生成 AI 活用による、アウトプットの質と量向上に向けての実践』

講師：山内 優馬（立命館守山中学校・高等学校 教諭）

#### 講演者プロフィール

立命館大学大学院国際関係研究科博士課程前期修了。英キール大学への留学や外務省でのインターンを経て、JTB 勤務。その後、国際社会で活躍する人材育成を志して、立命館守山中学校・高等学校にて教諭として英語教育に従事。生成 AI やメタバースを活用した教育実践・研究を通じて、生徒の自己表現力向上に取り組んでいる。近年の活動としては、文部科学省「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業（AI の活用による英語教育強化事業 /

**AI モデル校事業 / AI 英語活用リーダー事業」採択（2025）。文部科学大臣賞受賞（ICT 夢コンテスト 2024）など。**

---

山内先生は 2025 年より立命館守山高等学校が文部科学省より採択されて、ご講演の講師でもある山中司先生の助言のもと「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業（AI の活用による英語教育強化事業 / AI モデル校事業 / AI 英語活用リーダー事業）」の枠組みを使用し、生成 AI を活用した英語授業実践を広く行い発表されてきました。今回は英語教育における生成 AI の効果的な活用の実践例と今後の活用に向けた課題などを共有していただきました。

.....

以下にアンケートからのコメントを抜粋してご紹介します。

・山中先生の研究と連携しながら、トータルとしてすごいことをやっておられるのだとわかり、驚きました。基礎的な文法知識が欠如しているという高校生の問題を克服する手助けをするための一つの重要な道を示し、開拓しておられることがわかり、今後、このアプローチによる成果が計量的により明確に示されるのが待ち遠しいです。文法を〈AI から生徒が学ぶ〉ことは誰でも思いつくことですが、文法を〈AI に生徒が教える〉ことを文法知識の習得につなげるというのは、きわめて斬新な素晴らしいアイデアで、優れた教育効果が期待できそうですね。まず、〈教えられる〉文法学習は定着率がとても低いのが実態ですが、〈教える〉文法学習なら、やり方にもよると思いますが、生徒の主体的な学びが理解度を深くし、これまでにない高い定着度が期待できるのではないかと思います。さらに、このアプローチによって、生徒の自律学習（自宅での学習）が促される効果があるという報告が発表の中であったと思いますが、これは画期的なことだと思います。「気づき」がいかに習得にとって重要かは周知の事実です。AI に教え、自分が教えた成果がすぐに検証できることで、それによって教えた文法＝学んだ文法の問題点に自ら気づいて修正し、自分自身の文法知識をより正確で洗練されたものにしていくことができます。このような自律的学習が担保されるメソッドはまさに画期的というほかないと思います。

最後に、山中先生のプラットフォームが無くても、普通の先生が簡単に利用可能な AI ツールを使って同じアプローチを試みる方法がないかどうか、私も調べてみたくなりました。ただ、できることなら、山中先生や山内先生からも、そのような低コストの代替メソッドをご提案いただけないかと願っております。そんなメソッドがあれば、ぜひまた教えていただけるとありがたいです。素晴らしい実践発表、ありがとうございました。お疲れさまでした！

・大変勉強になりました。「育てる AI」が実用化された際には、活用したいと思いました。

・最初の「育てる AI」では、AI に関係副詞を教えるという実践のお話であり、予想外で驚きました。確かに「教える」ためには正確な知識が必要なので、逆説的に生徒の学習が深まるというプロセスに合点がいきました。後半の「普遍性」という点で、Gemini を利用した「壁打ち」を通して、生徒の英作文の質や量が向上したことに、感銘を受けました。まさに AI 時代の英語教育の先駆的試みであり、「大学入試のための英語教育」とは一線を画した、CEFR での確実なレベルアップを保証する、英語教育の「イノベーション」であるという思いを強くしました。たいへん明るい未来を感じさせるお話であり、山内先生には心より感謝を申し上げます。

・AI を実際の授業での活用例が大変参考になりました。今までは、添削や問題生成などといった教員側の恩恵ばかりかと思っていましたが、生徒に AI を活用させることで、英語力を上げる方法の例を本日

知れたことで、今後の授業構成への参考になりました。まだ、発展途上の段階の内容だとは思いますが、今回の例を参考にしながら私自身もAIを活用して、授業展開していき、自己研磨&生徒に還元できればと思います。

・示唆に富むすばらしい実践内容に大変驚きました。研究計画、ツール実装と準備、授業実践、研究成果まとめのどこを切り取っても大変な作業だったことと思います。特に感銘を受けたのは、生成AIを駆使して、受動的な学習から能動的な学習への転位を図られた部分です。また導入結果として、低位の生徒に最も顕著な学習効果がみられたことは大変興味深く、意義深いことと感じました。生成AIの利用法だけにとどまらず、生成AIを活用した時の教員の役割（計画と準備、授業内での児童・生徒との有効な関わり方、フィードバックなど）まで幅広く考えさせられる取り組み、かつご発表だったと思います。有意義な内容を共有いただき、ありがとうございました。

・生徒が先生役になって、AIに教えるという活動はたいへん興味深かった。学力下位層の英語力が伸びたとのことだったが、AIで上位層を伸ばす取り組みでどのようなことをされているのか、もしくは、こんなことをしたら上位層が伸びた、ということがあったら知りたい。

・生徒に目を向けている実践が印象的で素晴らしいです。積極的にAIを利用することで生徒の授業に対するモチベーションの向上を引き出す取り組みはとても参考になりました。

・ディベートの取り組みは生徒にとってとても良い経験になると思います。私も3年生最後の方で英作文からスタートしそれをディベートに繋げる取り組みをしましたが、生徒はとても楽しそうでした。今日はとても素晴らしい実践発表をありがとうございました。

・今の日本の核家族スタイルにとっても効果的だと思います。たとえば欧米では残業しない文化ですので、家族そろっての毎日の夕食があります。夕食時に「今日の出来事」を子供が親に話す機会や、習い事の習慣が低いので放課後に兄弟友人にも雑談を交えての振り返り時間がありますが、今の日本には共働きの家庭が圧倒的で週末くらいしか子供を囲んでゆっくり話す機会がありません。それをAIが代わりにアウトプットの場として活用する事が「宿題の自主性」につながった要因の一つでもあるのかなと個人的に思いました。

## その他 (Zoom開催について)

今年の冬の北海道は荒天による交通障害が多かったためか、Zoomだと心配なく参加できる、という意見が目立ちました。また、遠隔地である参加者も多かったことから、Zoomだと便利で参加もしやすい、敷居が低くなって参加しやすい、と言うお声を多くいただきました。一方で、対面だからこそ可能なネットワーキングの機会を求める声もありました。今回のように、京都から講演者と発表者の貴重なお話をリモートで共有しやすくなることも利点ですので、引き続き検討してまいります。

# お知らせ

## ◆研究会の開催日（予定）について

第 15 回研究会は 2026 年 6 頃を予定しています。研究会で取り上げたいテーマなどがありましたら、[info\\*spelt.main.jp](mailto:info*spelt.main.jp) (\*を@に変更してください) 宛に、是非ご意見をお寄せください。

## ◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しています。年会費は 4,000 円。会員の皆様は、口頭発表および論文投稿の資格を得ることができます。詳しくは、実用英語教育学会ホームページ (<https://spelt.main.jp/>) をご覧ください。

## ◆編集後記

AI の便利さ、時間短縮や効率化のメリットを享受していますが、一方で対学習者には、丁寧な指導や、生身の人間同士のやり取りだから感じられる温かさのあるラポールづくりの機会や、やり取りをもとに深く探究していく学習機会も失ってはならないと感じています。

温かい交流や人の魅力から学ぶことといえば、今年度をもちまして、長く実用英語教育学会の会長を務められ、そのお人柄と高校での教員、管理職としてのご経歴、大学での教員養成のご経験をもって本会の発展に尽力されてきた 釣 晴彦 先生が会長をご退任されます。また、時期を同じくして、本会の要である事務局長を務められ、その温厚なお人柄ゆえの丁寧な企画運営と会員間の温かい交流を促進し、本会の運営と後進の育成に惜しみない尽力をいただいた 竹内 典彦 先生もご退任されることとなりました。中等教育の現場をスタートに、大学教育・教員養成へと広くご活躍された先生方の英語教育にかける熱意と貢献、何よりもアクティブな行動力を見習い糧にしていきたいと思います。長きにわたり大変ありがとうございました。心より感謝申し上げます。（山崎）

実用英語教育学会

編集: *SPELT Newsletter* 編集委員 (山崎秀樹)

発行: 2026 年 3 月 31 日

事務局: 〒065-8567 札幌市東区北 16 条東 9 丁目 1 番 1 号

札幌大谷大学 社会学部 地域社会学科 石川希美 研究室内

実用英語教育学会事務局

Email: [info\\*spelt.main.jp](mailto:info*spelt.main.jp) \*を@にしてください。